

新型コロナウイルスの感染

拡大で苦境に立つ芸術文化活動の支援に役立てようと、国連教育・科学・文化機関（ユネスコ）が世界各国のアーティストによるオンライン討論会「レジリアート（Resilient Art）」を開き、ライブ配信している。日本の映画、音楽、演劇各界から5人が参加した日本版では、当事者間の結束や、政府に提言するための組織作りの必要性などについて議論した。

（富野洋平）

オンライン討論会

日本版の「レジリアート・ジャパン」は、「文化とコロナウイルス」の力を考える」と題して5月23日に開催。映画監督の河瀬直美を進行役に、劇作家の平田オリザ、俳優の別所哲也、ギタリスト

プロレや芸分巡国日
の「な」なを催6日
の「し」を今月
英語（Art）の
「アート」が話し
ユネスコ（Art）の
として「アート」を
「アート」と「レジ
プロジェクト」を
「アート」と「レジ
プロジェクト」を
「アート」と「レジ
プロジェクト」を

コロナ禍 芸術家ら結束を

オンライン討論で意見を交わす（上から）河瀬直美、別所哲也、向井山朋子、MIYAVI、平田オリザ



ライブ体験貴重に 政府へ提言必要

のMIYAVI、ピアニストの向井山朋子が意見を交わし、約2万人が視聴した。

まず問題提起されたのは、コロナ禍が舞台芸術に及ぼした影響だ。緊急事態宣言が解かれた今も、劇場は観客同士の距離を取る感染防止対策と収益とのバランスなどが課題となり、本格的な再開の見通しは立っていない。

平田は演劇界の現状について、「新しい生活様式」では、定員が2000人の劇場でも200人しか入場できないとの試算もあり、採算は全く取れない」と説明。稽古場も利用できず、多くの劇団が秋ま

での公演中止を決めているなどの厳しい現状を報告した。一方で活発になっているのが、オンライン上の活動だ。MIYAVIはツアーを延期する間に自宅からSNSでファンと交流してきたといい、「ポスト・コロナの世界は一変する。時代に適応できるように、僕たちがバージョンアップしていく必要がある」と強調。別所は「生のパフォーマンスを見られる体験がより貴重になっていくのでは」と述べ、今後は手軽なオンラインと貴重なライブ体験の「二極化」が進むとの見通しを示した。フリーランスで活動する芸

術家らへの支援を巡っては、日本の対応が不十分との指摘が相次いだ。

平田は、前年の活動状況を踏まえ、一定の手当が芸術家らに支払われるフランスの支援制度を紹介。「経済的な理由で才能をつぶすことが、国益を損なうことになる」という共通認識がある」として、文化政策を巡る日本と欧州などとの違いを説明した。

河瀬は「健康で文化的な最低限度の生活」を保障する憲法の条文に触れ、「文化的な生活に芸術の役割があり、社会を支えている」と強調。芸術活動に携わる文化従事者が結束を強め、「私たちがもっと声を上げる必要がある」と訴えて締めくくった。

討論の模様は英語、日本語の字幕付きで、13日から動画投稿サイト「ユーチューブ」の「なら国際映画祭チャンネル」で配信される。